

西光寺だより

第九十一号 平成三〇年三月一日発行

やわらかな春の日差しを感じられる季節となりました。「暑さ寒さも彼岸まで」と申しますが、春のお彼岸がくると暖かさを感じられる日が多くなってまいります。そんな春の訪れは冷たくなっていた気持ちまでゆっくりと解かしてもらえそうです。

一般にいわれる彼岸とは、彼岸会のことひがんえをさしています。また会とは法会ほうえ・法要のこと、彼岸とは此岸、こちら側の岸、迷いの世界、つまり私たちの世界に対し、あちら側すなわち悟りの世界、仏の世界という意味であります。だから彼岸会とは、仏の世界に生まれることを願って勤める法会、という意味になります。

『仏説阿弥陀経』には、「西の方には仏の世界が十方億もある。そのさらに向こうに極楽と呼ばれる世界があり、阿弥陀という名の仏がおられる。」と説き、『仏説観無量寿経』には、浄土に生まれるための様々な修行の第一番目として、「正しく西に向かって座り、あきらかに日没を見よ。心を集中し、宙にかかった太鼓のようにまんまるい太陽を見、目を閉じている時にも、その姿をありありと心に描け」と説かれています。

正信偈の中の七高僧の一人、善導大師は、このところを「春と秋の際（境い目、つまり春分と秋分の日）に、太陽は真東から出て真西に沈む。阿弥陀如来の世界は日の沈む方角に当たる」と解説されました。

これによって我が国では、約一二〇〇年昔の平安時代初期から、夕陽が真西の方角に沈む春分、秋分の日を中心に、西方浄土に往生することを願う法要が営まれるようになり、本願寺でも一週間、午前十時から、阿弥陀堂で、彼岸会法要が勤まっています。

お盆（盂蘭盆会）は、どちらかといえば、故人を偲ぶという意味合いが強いのに対し、お彼岸は自分自身の往生浄土を願うことが中心のようであります。お墓参り、お寺での法要、家庭でのお速夜のお勤めなど、あらゆる機会を通して往生浄土の願いを新たにし、ともにお念仏いたしたいものであります。

花

歌…夏川りみ

作詞…喜納昌吉

作曲…喜納昌吉

川は流れて だこどこ行くの 人も流れて だこどこ行くの
そんな流れが つくころには

花として 花として 咲かせてあげたい
泣きなさい 笑いなさい
いつの日か いつの日か 花をさかそうよ

涙ながれて だこどこ行くの 愛もながれて だこどこ行くの

そんな流れを このうちに
花として 花として むかえてあげたい

泣きなさい 笑いなさい
いつの日か いつの日か 花をさかそうよ

花は花として わらいもできる 人は人として 涙もながす

それが自然のうたなのさ
心の中に 心の中に 花を咲かそうよ

泣きなさい 笑いなさい
いついつまでも いついつまでも 花をつかもうよ

泣きなさい 笑いなさい
いついつまでも いついつまでも 花をつかもうよ



皆様もご存じかもしれませんが、これは夏川りみさんがカヴァーされている「花」という歌です。

春は芽吹き季節。寒さに耐えた花たちが暖かな光をうけて少しずつその蕾を開いていくように、どんな時でも自分の花を咲かせ続けて参りましょう。

夏川さんの透き通るような歌声をここではお届けできないのが残念ですが、心に響くこの曲を皆様にもお届けしたくて書かせていただきました。機会があればぜひ聴いてみて下さい。そして、皆様の心にもあたたかな春が訪れますように。

合掌

浄土真宗本願寺派 白毫山 西光寺

大阪府茨木市西河原一―七―二

電話 〇七二―六二二―四七九四

FAX 〇七二―六二二―九二九一

<http://www.osaka-saikouji.net/>

◆三・四月の行事◆

・三月二十一日(水・春分の日)

仏教婦人会 追弔会・総会

午前十一時三〇分〜追弔会(正信偈)

昼食

午後一時〜 総会

西光寺本堂

・三月三十一日(土)

春季永代経法要・追弔会

午後二時・午後七時

西光寺本堂

◎御法話 布教使 北畠 晃融 師

※なお、追弔会は午後一時三〇分より厳修致します。